

⑤ アン・ドルーヤン 著

『コスモス：いくつもの世界』

(日経ナショナルジオグラフィック社)

「コスモス」は、1980年に天文学者でSF作家のカール・セーガンによって監修され、世界初の宇宙ドキュメンタリーとして人気を博した科学番組です。2014年には天文学者のニール・ドグラス・タイソンによってリポートされました。この本は2020年に新たに放送された続編の書籍版で、初代コスモスの企画時から、またあのボイジャー計画にもカール・セーガンと共に携わった、彼の妻アン・ドルーヤンによる著作です。宇宙がテーマですが、考古学や宗教、脳科学などあらゆるトピックが登場します。すべての「なぜ？」がつかないことが宇宙の秘密を解き明かす鍵になり、私たち生命の謎と宇宙の謎はそうかけ離れたものではないことを思い出させてくれます。(N.S.)

440.4 ||Dru

⑦ 村上春樹 著

『猫を棄てる』 父親について語るとき

(文藝春秋)

著者の父親は大正6年にお寺の次男として生まれ、戦争を三度経験しています。父親について著者が覚えていること（例えば幼い時に一緒に海岸に猫を棄てに行ったこと）、この文章を書くにあたって確認した事実は様々なことを明らかにします。父親の人生の物語、戦争がそれに与えた影響、そして自分の存在がいかに偶然に支えられた不確かなものであるか。

「もし、硬くて高い壁と、そこに叩きつけられている卵があったなら、私は常に卵の側に立つ。」これはエルサレム賞受賞の際に著者が行ったスピーチの一部です。

本書は名もなき卵たちの尊厳と、それを無慈悲に奪っていく高い壁についての物語です。それは決して過去のものではなく、連綿と続き私たちとこの世界をかたち作っているのです。(N.O.)

914.6 ||Mur



⑥ インゲ・シュテファン 著

『才女の運命 男たちの名声の陰で』

(フィルムアート社)

本書はソフィヤ・トルストヤ、イエニー・マルクスなど著名な夫やパートナーを持った10人の女性の生涯を取りあげ、女性達が才能豊かであったが故の不協和音や葛藤を、フェミニストの視点で捉えています。

このうちの1人、ゼルダ・フィッツジェラルドは、夫スコットと互いを傷つけ合い、精神を崩壊させながら凄絶な人生を過ごし、また1人ミレヴァ・アインシュタインも失望と貧困の中に後半生を送りました。ここには、女性達それぞれの苦悩の物語があります。

表紙は、室内画を多く描いたハンマースホイの作品です。北欧の著名な画家の静謐な世界と、フェミニズムとは必ずしも一致しませんが、題名は、「画家の妻のいる室内、コペンハーゲン、ストランゲルゼ30番地」この女性もまた本書に綴られた一人と言えるでしょう。(Y.K.)

280.4 ||Ste

⑧ 岡本健 著

『アニメ聖地巡礼の観光社会学』

(法律文化社)

「聖地」という言葉は、国、地域、人、年代によってその捉え方は様々です。ヨーロッパの聖地巡礼、イスラム教の聖地メッカ、高校球児の聖地甲子園球場など世の中には様々な「聖地」が存在しています。そして最近はアニメの舞台のモチーフになった地域を訪れる「聖地巡礼」がブームとなり、観光振興策の一環として地方自治体もその動向に注視しています。

本書では「アニメ聖地巡礼」を歴史、メディア、コミュニケーション、ツーリズムなど様々な視点で分析しています。今や日本の伝統文化とならび世界から注目されている日本のアニメーション、そのコンテンツが持つ魅力と地域をいかに結びつけられるかが、新型コロナウイルスによる観光業の苦境を脱却するひとつの要因となるかもしれません。(H. M.)

689.21 ||Oka